

な真理性があることを見出し、あるいは自らにやはり足りない点があることも認めて、他とあい携えて人類の真の目覚め・救いと福祉等に貢献する道をどこまでも模索していく必要もまた、あるのではなからうか。

著者の、時代に真摯に向き合う姿勢と粘り強い考察に敬意を覚えつつ、だからこその以上のような思いをとどめえずにいる。それは、すべて本書の次の課題であり、本書自身にこのことを求めるべきでないことは十分に承知しているつもりである。また、今、私が述べたようなことは、一人の学者のよくなしうるところでもないであろう。今後、仏教側が、協働して、著者が追求しているような課題に立ち向かってほしいと思うものである。

大貫隆・島蘭進・高橋義人・村上陽一郎編

『グノーシス 陰の精神史』

岩波書店 二〇〇一年九月二六日刊
A 5判 三八七頁 六八〇〇円＋税

同編

『グノーシス 異端と近代』

岩波書店 二〇〇一年一月二八日刊
A 5判 三八六頁 六八〇〇円＋税

中 西 恭 子

はじめに

本書は古代グノーシス主義から現代の新霊性運動に至る「グノーシス主義」的現象の諸相を論じる「グノーシス百科」として構想されている。古代・中世編である『陰の精神史』の主題は近世以前の西洋宗教思想史における「グノーシス主義」の変容であり、ユダヤ・キリスト教的伝統の周縁から正統主義に異議申し立てを行った古代グノーシス主義と中世の二元論的異端にみられる現世否定的救済論の動向に加えて、初期近世にスコラ主義的世界観に抗して超越的な「全体知」を介した信仰と経験的世界観の統合を求めるエゾテリックな思想と結社を扱う。

書評と紹介

理論・近現代編である『異端と近代』は、神秘主義・文学・近代思想史・新霊性運動という主題ごとに「グノーシス主義」の系譜に属するとみなされてきた東西の現象を時系列順に扱う。巻頭基調論文で論集の意図を述べ、各セクションの基調論文で問題提起を行い、個別論文では論文の著者それぞれが具体的な主題を詳論するという構成は「グノーシス主義」をめぐる連続講座としても読める。本書では「グノーシス」「グノーシス主義」の定義にかんする統一見解が画定されないままきわめて広範な現象が論じられているため、編集の意図と問題意識の所在を鳥瞰することは容易ではない。ここでは執筆者が「グノーシス主義」とみなす現象に注目しながら、まずは各巻の内容を紹介したい。

『陰の精神史』

大貫隆「はじめに 原グノーシスとグノーシス的なもの」は、近代の思想・文学から現代の新霊性運動やサブカルチャーまでの広範な領域にみられる「グノーシス的なもの」を指摘し、宗教史学派からヨナスの論考やナグ・ハマディ文書の発見を経てクリアーノに至る古代グノーシス主義の研究史を略述する。一九六六年にメッシーナで行われたグノーシス主義研究の国際会議で定められた定義に従えば、グノーシス主義とは次のような原理的には一定の条件さえ整えば普遍的に発生しうる現象であるという。その根本的な要素は、「超宇宙的な神的領域を可視的物質的宇宙と存在論的に対立させる反宇宙的二元論」「超宇宙的な神的本質と人間に内在する本来的自己の間の同質

性」および「この同質性の覚知をもたらす啓示」である。大貫はこの根本要素のうちすべてをみたす思考類型を「グノーシス主義」と、そのうち一つあるいは二つを満たす思考類型を「準グノーシス主義」とみなすべきであると提案しながら、このような問題意識は本書編纂当初から出版に至るまで執筆者のあいだに周知のものとして共有されていたわけではないと明言する。

第一部「グノーシス主義の本質」は、グノーシス主義に特有な世界観の構造を主題とする。大貫隆「宇宙の超越と神」はグノーシス神話の根本的な特徴を略述する。グノーシス神話は世界の起源を天界とし、宇宙の構造を超越的な善の世界・悪しき造物神の世界・人間界の三層から説明し、超宇宙的・超個人的な神的主体の拡散と回収という救済の教説を核心にもつ。また、グノーシス主義神話は否定神学的な語法で至高の存在を表現する。筒井賢治「知られざる神——キリスト教グノーシスの否定神学——」では、古代の「キリスト教的」グノーシスにおける「否定神学」の事例を『ヨハネのアポクリュフォン』などに拠って紹介する。

松村一男「グノーシス神話——自然神話と創作神話——」は、神話学研究におけるグノーシス神話研究の効用を問う。世界創造原理としてのエロスの挿話の引用や星辰崇拜の拒否などの主題の検討から、明確な目的をもって同時代の思潮から折衷的に編み出された人工的な「創作神話」の性質をグノーシス神話がもつことを明らかにし、「創作神話」の研究が「自然神話」を従来主な研究の対象としてきた神話学の射程の広がりや豊饒化

をもたらす可能性を示唆する。

野町啓「流離と回帰——救済モデル——」はグノーシス主義の救済神話の典型である『ヨハネのアポクリュフォン』を例に、宇宙の発出の起源にして魂の故郷である絶対的至高者の教説はグノーシス主義・ヘルメス主義・新プラトン主義に共通であるが、グノーシス主義の救済神話は絶対的超越界からの追放と悔悟を経て根源への回帰を説く点でヘルメス主義・新プラトン主義とは決定的に異なる、と指摘する。

第二部「古代のグノーシス主義」の基調論文である大貫隆「グノーシス主義の衝撃——古代末期の宗教運動——」は、グノーシス主義を新プラトン主義的グノーシス主義、ユダヤ・キリスト教的グノーシス主義、マニ教・ズルヴァン教的グノーシス主義に分けた上で、グノーシス主義の古代末期の宗教思潮に与えた衝撃を神論・宇宙論・人間論・救済論と終末論・礼典論・言語および図像表現の様式・生活倫理・政治権力論の各側面から紹介する。皇帝・帝室成員の守護霊や神格化された帝室成員の霊の宿る場所とされてきた星辰に対する崇拜の拒否を当時の一般的な政治権力観にグノーシス主義が与えた衝撃として位置づけている点は興味深い。

個別論文はグノーシス主義の周辺にあった諸思潮との関係を問う。月本昭男「古代メソポタミアの神話世界からみたグノーシス創成神話」は、グノーシス主義文書の創成神話と旧約聖書の神話の淵源である古代メソポタミア神話の創成神話を比較し、その類似点を指摘する。造物神による十二宮と七惑星天の創造の挿話は古代東地中海世界の神話共通の要素であり、メソ

ポタミア神話同様に被造物の世界を統治する七柱の神の説話をもつグノーシス主義文書にもそれを見出すことができる。メソポタミア神話は下位の神格の墮落を被造物の世界の誕生の契機とみなすが、グノーシス創成神話は旧約の人間創造論を否定的に捉えるにあたってそのような発想に依拠しているため、古代メソポタミア神話の直接の痕跡はみられないとはいえ、「先祖返り」の要素として観察することができる。

山本巍「プラトニズムとグノーシス主義」は、古代グノーシス主義の否定神学と造物神をプラトンの『パルメニデス』『ティマイオス』のそれと比較する。プラトンの著作における否定神学と「世界を造り上げる職人であり哲学者」としての造物神の教説は、困難な多様性に満ちたこの世の生を冷静に生きることと可能な限り「神」に近づく善い「作品」として造り上げよと哲学の徒を励ます教説にも通ずるが、グノーシス主義は不可知の至高神を世界の根源としながらも悪しき世界である現世への関心を徹底的に否定した結果、不可知の神の神秘を詳述する神話を語ること自体が教説に矛盾することとなり、人間が徳を追求して生きる可能性も奪う。

荻野弘之「ヘレニズム哲学とグノーシス主義——決定論的世界観の陰面——」は、ストア派から中期プラトン主義に至るヘレニズム哲学の宿命論とグノーシス主義救済神話の宿命論を表裏一体の陰面とみなし、その葛藤を該博に論ずる。ストア派の決定論は星辰界にみられる宇宙の精妙な秩序の摂理を讃美すると同時に、魂の修練を通じて宿命の甘受（運命愛）に至る方策を提示することで、人間を宿命ゆえの絶望に陥らせることなく

書評と紹介

その尊厳の根拠となる自由を擁護する。グノーシス主義の救済神話はそのような調和的宇宙観を根底から覆す。そこでは星辰界は悪しき造物主の下位に位置する悪しき神々とされ、「摂理」「宿命」が人間の行動を束縛する造物主に創られた悪しき神格として描かれるが、自己の認識によって一挙に超越に到達することによって「宿命」の呪縛が解かれる。宿命論的世界観に立つストア主義者とグノーシス主義者、宿命論的世界観に抗する中期プラトン主義者と教父は救済論と人間の自由と尊厳を共通の関心事とする。超越界の美に依拠する現世の美を否定して現世における徳の修練を放棄するグノーシス主義をプロティノスは批判するが、新プラトン主義もグノーシス主義も超越を指向する土壌に生まれた思想であり、教父と新プラトン主義者の双方にとってグノーシス主義は「内なる敵」だったと考えられる。

大貫隆「ゾロアスター教とマニ教」は、ペルシア起源の二元論的宗教であるマニ教と、類縁関係にあるゾロアスター教、ズルヴァン教の成立史と世界観の特徴を略述し、そのグノーシス主義的傾向はむしろペルシアの精神的状況のなかで形成されたと指摘する。近藤均「古代宇宙論・占星術・生理学とグノーシス主義」は、古代の宇宙論と占星術ならびにガレノス・ヒポクラテスの生理学の概略とその照応関係を簡潔明快に紹介する。古代の宇宙観はマクロコスモスとミクロコスモスの照応を宇宙と人間のあいだに想定して、神々の存在する星辰界を尊崇の対象とすると同時に星辰界の似姿としての人間に神性を認めるが、グノーシスの宇宙論・身体論は七つの惑星天を造物神の下に位置する世界の支配者として位置づけ、人間の身体を悪と

みなすため、古代の宇宙論の発想を根本的に転覆するものとして位置づけられる。古代ペルシアの宗教思想についても、ヘレニズム思想における宇宙論・占星術・生理学の照応関係についても邦語文献はきわめて少ないため、この二論考は貴重である。

ゲルシヨム・シヨレムによれば、ユダヤ神秘主義の生ける核心と起源はカバラにあり、その淵源にはラビ・ユダヤ教の伝統に温存されてきた「グノーシス主義」的伝統が存在するという。手島勲矢「カバラ、メルカバー・ヘイハロット文学とグノーシス主義——ゲルシヨム・シヨレムとユダヤ神秘主義の「起源」問題——」はこの議論をふまえてメルカバー・ヘイハロット文学とカバラの成立史と思想的特徴を略述したのち、シヨレムの「ユダヤ教グノーシス主義」はキリスト教以前のユダヤ教における「一神教的伝統の多神教的理解」であると論じ、シヨレムの弟子J・ダンによるシヨレム批判を紹介する。ダンはキリスト教的グノーシス主義からの影響関係に加え、ミドラッシュやタルムードにおけるグノーシス主義の本質的要素の欠如を根拠に、古代グノーシス主義と初期ユダヤ教神秘主義の歴史的関係の立証は困難であると論じる。また終末論的救済論はユダヤ黙示文学に顕著な特徴でもある。北博「ユダヤ教黙示文学とグノーシス主義」では、ユダヤ教黙示文学の「幻視する預言者」像と終末論の展開を略述し、グノーシス主義の背景にローマ帝国の統治に知的世界を破壊されたヘレニズム諸都市隷属民の新たなアイデンティティ形成をみるクルト・ルドルフの説に依拠して、ユダヤ教黙示文学を帝国支配下にお

ける民衆の抵抗の文学とみなす。ユダヤ黙示文学は歴史的・時間的次元の救済を求めるが、グノーシス主義は思弁を駆使した存在論的再解釈によって現世内超越の方向を目指す点で決定的に異なっている。

第三部「正統と異端」の主題は、キリスト教正統主義からみた「内部の敵」としてのグノーシス主義像である。基調論文となる村上陽一郎「二元論と一神教」は、三位一体説の正統性、「四つ文字言葉（テトラグラマトン）」の神秘性、善悪二元論との葛藤など、近世初期に至るユダヤ・キリスト教的伝統のなかにみられる神の唯一性を保証するための議論の諸相を素描する。

出村みや子「古代教父のグノーシス像」は、ナグ・ハマディ文書のグノーシス主義者像と比較しつつ古代教父のグノーシス主義者に対する態度を論じる。反異端論者は同じキリスト教的伝統に依拠するグノーシス主義者と正統主義が判別困難であるがゆえにグノーシス主義駁論を著し、正統主義との世界理解の差異や事実に対する性的放縦を強調してグノーシス主義者を戯画的に描いた。しかし、実際に聖書解釈の正当性をめぐる論争を正統主義者に提示したのはむしろグノーシス主義者の側である。テルトゥリアヌスやアレクサンドリアのクレメンスらもこの事実を強調する。グノーシス主義者に抗して現世を神による教育の場と見なし、現世内禁欲を殉教と等価に扱って修道制の理論的根拠を提供したオリゲネスは、キリスト教成立の当初から聖書解釈の不一致が存在し、グノーシス主義の成立も聖書を熱心に研究する人々が多様な聖書解釈を行った結果であると指

摘して正統主義的聖書解釈の礎を築いた。戸田聡「グノーシス主義と修道制」は隠修士パコミオスの修道院がナグ・ハマディ文書が所蔵していたとする説の当否をめぐる論争を紹介し、グノーシス主義者とエジプトにおける初期修道制に共通する禁欲主義的傾向に着眼して両者の思想を比較する。グノーシス主義文献と修道制には食・性の禁欲と世俗の財産の放棄がみられる。「物的書物」としてのナグ・ハマディ文書の成立に修道者が何らかの形で関与していたため、その修道者の共同体ではナグ・ハマディ文書は必ずしも異端的文書として扱われていなかった可能性がある。また、四世紀におけるグノーシス主義の実態と性質を考察するには、ここでは修道者の関心事である倫理と、グノーシス主義者の関心事であるギリシア神話の援用の問題を扱うエウアグリオスの『グノーシスの諸章』は有用な検討材料となる。

中世の「グノーシス主義」は正統主義的キリスト教からみた「異端」として言及される。高橋保行「ビザンチンの教会とグノーシス派」は東方正教会のグノーシス主義的異端を紹介する。禁欲主義的な修道運動のメサリア派、聖職者の選挙制と世界の物質性を否定して聖像破壊運動に与したパウロ派、徹底的な善悪二元論に立つボゴミール派はいずれも直接に古代の異端と関係はないが、現世否定的かつ善悪二元論的な神学に依拠して選民意識を鼓舞するため、グノーシスの異端として認識される。正教の世界観における修道は知的思考の陥穽から信徒を守る機構でもあり、知は神の導きによってはじめて把握可能であると同時に典礼の中で会衆とともに共有されるべきものである

書評と紹介

り、全き善である至聖三者（三位一体）は人間の生活に臨在し、被造物の世界を絶えざる更新と超越に導くが、グノーシスの異端は権力を否定した質実な生活意識をもって庶民を魅了する一方で、典礼の積極的な価値を否定し、観念を具体化する場として修道を位置づけたグノーシスの異端の世界観はことごとく正教の世界観と対立したが、その神理解は正統主義からの逸脱のゆえに公会議の議題とはならなかった。

山内志朗「普遍論争とグノーシス主義」によれば、当時の脅威となった異端はアウグスティヌスらを通して知られる古代の異端よりもむしろ「マニ教」を総称とする中世異端思想であった。悪の原理による可視の世界の創造を説いて典型的な善悪二元論に立ち、みずからを一举に神と結びつきうる「天使的存在」とみなすカタリ派はその一種である。普遍論争は現実世界を捉える枠組みを論じる場でもあり、正統主義キリスト教にとつては信仰生活を規定する創造論や倫理規範を脅かす「中世グノーシス主義」との闘いは避けられない。カタリ派は現世否定と特権的な現世内超越の模索ゆえに、「善」の欠如としての悪を日常の生に引き受けて生きよと説く正統主義の思索と衝突した。

第四部「ルネサンスのグノーシス主義」は、ルネサンス・初期近世のエゾテリスムにおける「グノーシス主義」を扱う。基調論文である村上陽一郎「グノーシスと陰の精神史」では、グノーシス主義的な発想が近世以後のヨーロッパの思想史においても現世肯定的な「正統主義的」「世界観と表裏一体に存在してきたことを指摘する。個別論文では、魔術と科学の分離してい

ない時代にあつて信仰と体験的な知の融和を求め、当時の「正統主義的」世界観であつたスコラ主義を補完する「全体知」を追求する精神的格闘の諸相が紹介される。

桂芳樹「ルネサンスのヘルメス主義とグノーシス主義」は、「全体知」の起源を古代の新プラトン主義に求めて世界の一体性の回復と超越を探究するフィチーノ、ピコ、ブルーノらのヘルメス主義の展開を紹介し、ギリシア教父や古代の新プラトン主義者の著作に触発されたルネサンスのヘルメス主義には世界そのものの存在を否定する傾向こそ見られないが、無限に自己超越を求める点ではグノーシス主義と表裏一体であると論じる。村上陽一郎「パラケルススとグノーシス主義」は、ルネサンスの反スコラ主義の潮流に根ざした知的アナキストとしてパラケルススを描く。パラケルススの思索には新プラトン主義的な傾向が強いが、世界が神によって作られた善なるものであることを信じ、経験に基づく魔術的・科学的な思索と信仰の一致をめざす点で現世肯定的であり、現世拒否の傾向は見いだせない。

在野の思想はどうだろうか。一二世紀後半以後、正統主義神学の形成の場とは一線を画した場で学僧たちによって彫琢された聖杯伝説は、聖杯探索の旅と帰還の物語から聖杯の騎士たちによる至高の観想と探究の物語に変容する。横山安由美「聖杯伝説とグノーシス主義」によれば、聖杯伝説の変容はスコラ哲学における聖餐論の精緻化と中世盛期の救済論的な終末待望を色濃く映し出しているという。選ばれた少数者に開かれた不可知の至高の知解という物語の構造はグノーシス主義とも共通す

るが、むしろ「死と再生の物語」として解釈される場合が多い。一九世紀ドイツの神学者バウルの提唱以来「近世ドイツにおけるグノーシス主義の祖」とされてきたペーメの世界像は古代のグノーシス主義と酷似する。蘭田坦「ヤーコブ・ペーメとグノーシス主義」はペーメの思想をヨナスの「グノーシス主義」の定義に依拠して分析する。ペーメは正統主義の環境に育ちながらも、神秘主義的な資質に依拠して悪の起源を問い、神と自然の関係を独特な直観によって把握する。その発想の源はパラケルススの錬金術思想と一七世紀ドイツのキリスト教的終末論であり、絶対的至高神は被造物には認識不可能な神性をもつため被造物の世界に可視的な姿で顕現することはなく、被造物の生きる可視的な世界は神の本質への接近を試みた天使ルチフェルが神の怒りを受けて墮落した結果として創られた悪しき世界とされている。

薔薇十字団とフリーメイソンはむしろ世界肯定的である。中井章子「薔薇十字団とグノーシス主義」は一七世紀の薔薇十字文書に言及する。薔薇十字団は当初、『化学の婚礼』の著者であるアンドレーエの周辺から架空の結社として登場したが、キリスト教の信仰と科学的・魔術的な自然知を融和させつつ救済を与える「全体知」の探究を奨励するメッセージは同時代の西ヨーロッパの知識人からたちまち熱烈な賛意をひきおこし、ロマン主義以後における薔薇十字結社の結成にインスピレーションを与えた。その思想には善悪二元論的な傾向はなく、魔術と科学が分裂していない時代にあつて「自然という書物」を正しく理解する言語を探究すると同時に魔術的な自然知に依拠して

世界を再生させようと人々の結集を呼びかけるものであり、根本的に現世肯定的である。竹下節子「フリーメイソンとグノーシス主義」は近世以来のフリーメイソンの活動と思弁の歴史を紹介し、その象徴体系におけるグノーシスの要素を素描する。

フリーメイソンは本来、硬直化した教会の権威に抗してヘルメス主義的エゾテリスムとキリスト教を折衷した象徴体系を彫琢してキリスト教徒の霊的向上の道を模索する団体だが、一九世紀以来そのキリスト教色は薄まり、第二次世界大戦後にはフリーメイソン迫害史の実態も解明されたため「グノーシスのかつ親ユダヤ的な陰謀集団」としてのメイソン像は棄却されつつある。その象徴体系はグノーシス的ではない。ダビデを介してソロモンに伝えられた神の啓示としての世界の設計図の解読によって現世内超越をめざす態度も、智恵・力・美という全体として実現されるべき相互補完的な三つの徳をロジを支える原理とみなした上で石工道具などの象徴を会員が達成すべき徳目に関連づけて理解する態度は根本的に世界肯定的であり、二元論的な色彩も薄い。

「むすび」である村上陽一郎「思想・精神運動としてのグノーシス主義」は『陰の精神史』全体を通観し、「グノーシス主義はとらえどころがない」と述べている。このような感想を共有する読者も少なくはないだろう。

『異端と近代』

本巻の問題提起である高橋義人「哲学・文学・芸術の中のグノーシス」はヨーロッパの精神史に遍在する思考様式としての

書評と紹介

「グノーシス主義」の水脈の重要性を主張する。しかし、本論考における「グノーシス主義」概念の定義は明確ではなく、超越への意志と救済願望が盛られた芸術作品や思想であれば無差別的に適用されているように見える。「グノーシス主義」は神秘思想とどのように異なるのか。第一部「神秘主義とグノーシス」の諸論考ではさまざまな宗教的伝統の「神秘思想」と比較してこの問題を扱う。

基調論文である島藺進「グノーシスは神秘思想か」は、如来教にみられる現世忌避と救済待望の構造を指摘し、研究者・実践家としてエゾテリスムの普遍性を説いて現代の神秘思想家たちにその活動の理論的根拠を与えたゲノンと冷静な歴史学的研究の対象としてエゾテリスムを観察するフェーヴルの「エゾテリスム」概念を折衷し、「隠された深い真理を知的に認識することを通じて、究極の自己変容・自己完成を目指すような思想や実践」を広くエゾテリスムとして理解する方向性を示唆し、救済と終末への待望とは裏腹の現世否定的ニヒリズムに貫かれたエゾテリスムとしての「グノーシス的思考」は必ずしも西洋に限定された思考類型ではないことを明らかにする。

上山安敏「ユダヤ教神秘主義とグノーシス主義」は、ユダヤ教神秘主義をめぐる二つの明快な見取り図を提供する。ひとつは近代ドイツ語圏のユダヤ教神秘主義研究史と精神史の照応である。シヨールムは、ハルナツクやグレーツらの提唱するキリスト教中心の初期ユダヤ教史像に抗して大胆にユダヤ教神秘主義の復権を打ち出した思想家として位置づけられる。もうひとつはユダヤ教グノーシス主義の生成の歴史である。ユダヤ教は

グノーシスの思想を律法に隠れた神を発見するための解釈の技法として発展させた結果、ユダヤ教グノーシスはラビ体制の中核部において秘術と魔術の実践を通じて民衆信仰と接触し、それを吸収して生き続け、カバラやハシディズムの母胎となつたと考えられる。

鶴岡賀雄「グノーシス主義とキリスト教神秘主義」は、本書を読むさいの指針となる重要な論考である。ここではまず「神秘主義」概念の拡散が指摘される。「神秘主義者」「神秘家」の名称は基本的には他称であり、「神秘主義 (mysticism)」じたいが一九世紀に発明された概念である。ところが、「キリスト教神秘主義」という概念が実質的に成立したのは神を巡る言説の奥義と神学が分離した一七世紀のことである。「神秘主義」は正統スコラ神学を補完する「真のキリスト教」を自覚的に設定する営みであり、「グノーシス」はこの当時「神秘主義」とほぼ同義語として用いられていた。フェヌロンら「キリスト教神秘主義」の発明者は歴然たる異端であるグノーシス主義を「神秘神学」にそのまま加えることはないが、「グノーシス」を「選ばれた者に与えられる秘密」「純粹愛」として、「グノーシス者」を霊的人間として認識している。彼らのいう「グノーシス」はエリート主義的な完徳への指向や秘密の伝授という思想の点で、古代グノーシス主義者の「グノーシス」理解にも通ずる。脱教会化の進んだ一九世紀には「神秘主義」はキリスト教の枠を越えた概念となり、オカルティストのなかには太古の叡智を継承する異端的グノーシス思想を称揚する者も現れる。同様の歴史的状況にある「グノーシス主義」概念も「神秘主

義」概念同様に概念が拡散している可能性も十分に想定できるのではないか、という問題提起は、正統主義的世界観の補完を試みるあらゆる近代思想・近代文学のなかに「グノーシス的なもの」を見いだそうとする本巻の意図に一石を投じている。

竹下政孝「イスラーム神秘主義とグノーシス主義」では、イスラーム世界におけるグノーシス主義的思考はスーフィズムよりも過激シリア派、とりわけイスマール派の思索に明確であると指摘し、それらとグノーシス主義の世界像・救済思想を比較する。スーフィズムもイスマール派も覚知と天上界への復帰を呼びかけるが、新プラトン主義の影響とグノーシス主義の影響を画然と分けることは難しい。イスマール派の説には傲慢に陥って墮落した原人の悔悟と神的指導者への帰依による救済の教説がみられる。また、スーフィズムを代表するイブン・アラビーの「完全人間」の思想はグノーシス主義の原人神話の影響下にあるが、物質世界を否定する終末論的な立場にはなく、完全人間を地上の肉体を備えた人間として認識して人間の身体性を否定しない。

津田眞一「グノーシスと密教」では「真理の啓示を理解するとき救済に至る」とするブルトマンのグノーシス主義理解を密教思想史にも適用し、『金剛頂経』における宇宙の階層形成の挿話や大宇宙に照応して「本来の自己」に到達する原人プルシヤの思想とグノーシス主義神話の類縁性を指摘する。佐藤研「禅とグノーシス主義」は否定神学的な表現で至高者を表現する禅とグノーシス主義の思考構造を比較し、禅の樂觀性とグノーシス主義の悲観性を浮き彫りにする。救済神話をもたない禅

は超越を内在化する人間肯定的な性善説に立って超越的な世界と日常の可視的な世界を表裏一体とみなすが、グノーシス主義は超越と日常を画然と切り離し、現世への絶望に依拠して超越の内在化を拒否しながらも救済と覚知に至る超越の神話を備えているのである。

第二部『文学とグノーシス』の主題は西洋近代文学におけるグノーシスの系譜である。基調論文である高橋義人「グノーシスの象徴と芸術」は、ゲーテから二〇世紀初頭に至るドイツの文学にみられる正統主義の宗教にかわる新しい覚知の宗教の希求や「上昇と下降」「失われた楽園への回帰」「墮罪と救済」「世界の起源の忘却と知への覚醒」といった「グノーシスの思索」を列挙する。村本詔司「ファウスト文学とグノーシス主義」は、教父たちがグノーシス主義の祖とみなしたシモン・マグスと重ね合わせて近世以後のドイツ文学で描かれるファウスト像の歴史の変遷を論じ、ファウスト伝説は「グノーシス主義者」というよりも魔術師・錬金術師としてのファウストを描いており、終末論的な現世否定の傾向はみられない、と指摘する。高橋義人「ヘッセとグノーシス」は、ユング派の精神分析治療の影響下でヘッセが著した小説『デミアン』に盛られた「アブラクサス」「墮罪の神話」「失われた楽園への覚知による回帰」というグノーシス神話の要素を作品への内在的理解に基づいて素描する。稲垣直樹「ユゴーとグノーシス主義」は、自由思想家の両親の元に生まれて脱カトリックの立場を貫いたヴィクトル・ユゴーの作品にみられる「終末と救済の待望」「シンメトリの構造」「人類史再構築のヴィジョン」といったグ

書評と紹介

ノーシス主義神話に通じる要素を指摘し、ユゴーはグノーシス主義者であったと結論する。鈴木雅之「ウィリアム・ブレイクとグノーシス主義」は、ブレイクは近世の新プラトン主義者やスウェーデンボルクのほか古代宗教史を扱った複数の著作を読んでグノーシス主義的な思考にふれ、理念を擬人化した神格像や「悪しき世界の造物主」を配置して正統主義的世界観の転覆を企図する作品を書いたと指摘する。

第三部「グノーシスと近現代思想」の基調論文である高橋義人「グノーシスと近現代思想」はマイスター・エックハルトからシュタイナーに至るドイツの神秘思想の系譜に見られるグノーシス主義的思索の系譜を追跡する。

山脇直司「ドイツ観念論とキリスト教的グノーシス」は、ドイツ観念論における正統主義的キリスト教の補完をめざす「グノーシス的」な世界観の例を紹介する。後期フイヒテの思想は、思考によってのみ把握可能な至高の超越的存在を認識した人間が到達可能な神の愛に生きる浄福と、古代のグノーシス主義者に深い影響を与えたヨハネ福音書に依拠してキリスト教の真理観を重ね合わせ、臨在する神のリアリテイの現前を試みた。シェリングもヨハネ福音書にキリスト教の最良の啓示理解を見いだすが、現世は善悪の角逐する「歴史の国」であり再臨のときまで救済はありえないと考えた。ヘーゲルは万人に自由の実現すなわち進歩をもたらしたキリスト教の効用を認めながらも、自己陶冶する人間が到達すべき「神の座」ともいえるべき絶対知の構造をキリスト教の三位一体と類比的にとらえ、「知識による救済」としての哲学による宗教の止揚を説く。同時代

人からペーメの再来といわれたバーダーはカトリックの立場から、先在の善なる神と人間の根源的自然を復活させる両性具有者としてのキリストを想定し、地上のエロスも肯定した。彼の思想においては、人間はアダムの墮罪によって失われた「精神」によって「身体」と「靈魂」を統合してより高次の自然に生まれ変わるとともに、人間の原像が備えていた両性具有性を回復するために婚姻を結ばなければならない存在として捉えられている。

久米博「原罪と悪の象徴論」は、「悪の起源を全体的に問う思想としてグノーシス主義は西洋思想に貢献した」というポール・リクルールの提言をうけて、ドゥルーズのいう「シミュラクル」(模造)の概念がグノーシス神話の思考法と共通の構造を持つことを指摘し、アウグスティヌスの反グノーシスの原罪観念を例に、グノーシス主義を論駁するために自らもあえてグノーシス的な態度をとる「反グノーシス的グノーシス」とグノーシスの関係について考察する。的場哲朗「ハイデガーとグノーシス主義」では、ハイデガーの哲学を「偽装されたグノーシス主義」として位置づける。難解な哲学的表現を避けて深遠な思索を試みたハイデガーの実存論的分析論に心酔したヨナスに触発された場合もハイデガーのテキストに沈潜し、「ラディカルな二元論」「深刻な投企性によって生じた異邦にあることの懊悩」「覚知をうながす呼び声」という古代のグノーシス主義と酷似する問題意識をもつ箇所を列举する。大田俊寛「鏡像段階論とグノーシス主義」は、ラカンの「鏡像段階論」を心理学的側面から自己観照のプロセスを整合的に説明する理論として

紹介する。ここでは、「人間は自己自身の姿を知ることができないために鏡の中の虚像に自らの姿を発見する」と説く「鏡像段階論」は、自己観照ゆえに引き裂かれる人間が到達する「妬み」「自己像の偽造」という主題と絶え間なく分裂を続ける神話の構造を整合的に説明する点でもグノーシス神話の自己観照と酷似する思想として論じられている。

高橋原「ユング心理学とグノーシス主義」によれば、ユングは正統主義的キリスト教の世界観では説明不可能な悪の問題を補完する思考体系としてグノーシスの思考を追求した。ユングにとって神話は人間の無意識内容の進化にに応じて進化するものであったから、市民道徳化したキリスト教が扱わない悪の問題を十全に説明するためにはエソテリズムの系譜に依拠する必要があった。ユング心理学は、世界の全体性と生の意義を回復するために自らの源である集合的無意識へと回帰する必要があると説いており、グノーシス主義神話の世界の流出と根源への回復の教説と問題意識を共有する。ユング心理学の宗教化を批判したブーバーとの論争を経てもユングは終生キリスト教徒を自認してグノーシス主義者とみなされることを嫌い、キリスト教的伝統のうちに自らの心理学を位置づけようと試みた。

第四部「グノーシスと現代」の基調論文である島蘭進「グノーシスと現代の物語」は、現代日本のサブカルチャーにみられる特権的な超越への意志や現世における流滴の生といったグノーシスの表象を「新しいイノセンス」とみなし、そこにみられる個人の自我の救済を主眼とするニヒリズムの介在を憂慮する。

小林康夫「シュールレアリスムとグノーシス主義」は、ブルトン『ナジャ』において男性主人公の覚知を開示する女性ナジャとグノーシス神話におけるソフィアの位置づけに共通性を指摘するエッセイである。

出村みや子「フェミニスト神学とグノーシス主義」は、フェミニスト神学の視点からグノーシス主義の再解釈を行ったエレーヌ・ペイゲルスの研究以後の動向を紹介する。ペイゲルスはナグ・ハマディ文書を検討して『マリアの福音書』などに登場する女性使徒・女性教会指導者の地位の高さを指摘し、正統主義による異端論駁は教会内部の女性の指導権をめぐる論争という政治的な側面も備えていたと論じて、神的存在が両性具有や男女一対として表象されると同時にアダムの魂を覚醒させる霊的エバも登場するグノーシス主義文献に男性中心主義的な聖書理解に替わる聖書理解の代案を求めた。近年の研究はより冷静であり、グノーシス主義における女性ジェンダー・イメージの多様性も分析されている。グノーシス主義の禁欲主義は結婚や出産を否定する点で特異であるが、今日では男性中心の聖書解釈に拠らない信仰をめざす女性のライフスタイルは多様であるため、この点にかんするフェミニスト神学者の評価は分かれている。

深澤英隆「ルドルフ・シュタイナーとグノーシス主義」によれば、秘教性のゆえに宗教史的な検討の対象とされる機会に乏しかったシュタイナー人智学は、「現代のグノーシス」として批判されるが、シュタイナー自身はむしろ薔薇十字思想に親近感を抱いており古代グノーシス思想には断片的にしか言及し

書評と紹介

ない。シュタイナー人智学の宇宙論・人間論にみられる区分原理の図式や人間主義、ナルシスティックな自己崇拜はグノーシス主義に通じるが、「霊的科学」を標榜しているために生の究極的目的や救済といった形而上的・宗教的な問題には言及せず、むしろ身体的・質料的要素を重視する。「霊的認識」による聖書の字義のエゾテリックで超感覚的な解釈を強調するシュタイナーのキリスト教解釈は先在する宇宙的キリストを打ち出して、グノーシス主義の特徴である仮現説を否定する。深澤は議論の端緒で「グノーシス（主義）」の語用論を批判的・中立的・肯定的の三種の用法に分けて端的に論じており、本書を読み解くさいの貴重な指針を提供する。現在のドイツではシュタイナー思想に依拠する「キリスト者共同体」が正統主義的キリスト教からの激しい批判にもかかわらずカトリック・プロテスタントに次いで信者を集めているという指摘もまた興味深い。

加藤幹郎「映画、歴史、不可知論——アンドレイ・タルコフスキー論の余白に——」は、アンドレイ・タルコフスキーの映画作品にみられる不可知論と覚知のモチーフを素描する。島蘭進「新霊性運動とグノーシス主義」はニューソート为例に、新霊性運動一般にみられる「覚知による自己超越」はグノーシス主義の特徴であるが、個人の福祉をめざす現世肯定的思考も一般的にみられる点で新霊性運動は必ずしもグノーシス主義的ではない、と指摘する。

『異端と近代』は結語においてふたたび現代における「グノーシス主義的なものの復興」に言及する。島蘭進「むすび グノーシス主義と精神史の現在」は「コスモスの失墜」や「悪」

の实在の認知に関わる問題を通じて現代におけるグノーシス主義的なものが「復興」していると分析し、そこにみられるエリート主義とニヒリズムの克服の途を模索する。

本書を通観して

古今東西の宗教思想における「グノーシス的なもの」を網羅的に論じ、西洋思想史の地下水脈の系譜を明らかにしようとする本書の試みはきわめて野心的であり、連続講演録という器はその試みを盛るにふさわしい。個別論文で指摘される事実も「グノーシス主義」と見なされる事象の実態を知る上で示唆的である。直接に古代グノーシス主義に接触せずとも同様の思想的傾向をもつ文学や思想も検討の対象となっており、類似の原理に依拠した系譜学の構築への意志には圧倒される。しかし、全巻を通読しても「グノーシス主義」の全体像は焦点を結ばない。執筆者のなかには、正統主義の権力に抗して悪の起源に正面から対峙するとともに日常を超越する至高を目指す特権的な知を志向する思想に篤い思い入れを抱く者も散見され、宗教研究者たる者、やはりこのような事象にも深い理解をもたなければならぬ、とも強く感じさせられる。この点で本書はまさに「グノーシス主義」を体現する。

しかし、本書を学術書として読むならば、いくつかの問題点が明らかにすることも指摘しておきたい。まず、鶴岡賀雄が所収論文で危惧するように、宗教史学上の概念である「古代グノーシス主義」の特徴を正統主義的な宗教観の補完を試みるさまざまな思想に適用しようと試みれば、逸脱する現象を拾い上げ

ようとして「グノーシス主義」の概念は限りなく拡散する。個別論文の事例からも示唆されるように、宗教史上の概念としての「グノーシス主義」は「異教」「異端」の概念同様に、正統主義に異議申し立てを行う思想に正統主義の側から付された蔑称に起源をもつ。古代のグノーシス主義者も「グノーシス主義」を自称したわけではない。近世以後の神秘思想家も超越に至る覚知の鍵としての「全体知」を称揚しこそすれ、「グノーシス主義者」の蔑称をもってよばれることを好まなかった。そのようなことを鑑みても、グノーシス主義の系譜学に説得性をもたせようとするならば、各巻の問題提起の段階から「グノーシス主義」概念と「グノーシス」概念は峻別して論じられなければならなかった。また、宗教思想史におけるその変遷を精神的状況に照らして浮き彫りにする試みも明確に打ち出されるべきであった。

また、本書の論考のなかには、論題とは一見関係のなさそうな「現代におけるグノーシス主義の克服」について序論・結論で唐突に言及するものも散見される。本書は「他者への共感を欠いた自己超越と世界の破壊をめざす終末論的ニヒリズムの克服」を隠れた主題としているのであろう。確かに二〇世紀の「宗教学」は、宗教現象に内在する論理を共感的かつ楽観的に提示しようと試みて、いかなる「宗教」のなかにも「全体知」の回復によって生を豊かにする装置を見いだそうと試みこそすれ、宗教の「グノーシス主義的」な側面にはあえてふれようとしてこなかった。オウム事件のみならず九・一一以後の状況が宗教における「悪」や「暴力」の介在を切実な問題として提示

するいま、宗教性善説を強調する学説はもはやかつてのようには読者にとって強力な説得力をもたない。宗教学はいまこそ宗教思想における「悪」の問題を徹底的に問わなければならぬ。そのような立場からグノーシス主義の系譜を探索し、「悪」の問題を問い直す契機として成果を読者に提供するべきだ、という見地から本書は編まれたのもあろうから、「現代におけるグノーシス主義の克服」という問題提起は巻頭論文の段階からはつきりと明示されるべきであった。

「講座」、すなわち連続講演録を読むことはかつて、「知」の全体像に迫る第一歩であった。教養主義的な価値観が崩壊の危機に瀕し、「学知」も限りなく細分化して錯綜する現在、「知」の体系に迫るには連続講演の形式では限界がある。さらに、日本の研究者には一定の距離を保って西洋の宗教思想の伝統を観察することも可能であろうし、またそのような視点に立った研究の成果を世界に提供することが期待されている。その地下水脈についても同様であろう。時代の要請に応えたソリッドで明快な「グノーシス研究の手引き」を編むことも本書の執筆陣と岩波書店にとっては決して不可能なことではない。